

毎月11日掲載

防災・減災のページ

共催8カ所から被災地へ

@宮城県沿岸部

むすび塾

● 取り組み進展

集った8人は地域防災の実践者。担い手が固定化し、裾野が広がらないといった悩みが吐露された一方、被災地に来れば誰もが防災に本気になる」といった声も聞かれ、震災の実相を共有することから、地域の備えを深めていく大切さを確かめた。

● 思い込み危険

宮崎市の保育士児玉のぞみさん(44)は、震災で大きな被害を受けた三陸沿岸集落の地形が地元と似ていると感じたという。この惨状を見て、この地で被災体験を聞く衝撃は大きい。帰ったら、『これは大丈夫』という安易な思い込みは危ないと思えた」と危機感を強めた。

震災遺構は保存と活用を求める意見が目立った。東京都文京区の豊島ヶ岡町内会の鎌田邦彦会長(78)は「小学校高学年のころから遺構を見学させて津波の怖さを知ってもらい、防災の担い手育成につなげたい」と提案した。

● 思い込み危険

住民の参加者は北海道や関東、東海、近畿、四国、九州から集まった8人で、被災現場に入るのは初めてという人がほとんど。視察後の語り合いでは、震災教訓を起点に備えを考える重要性や、報道機関が地域防災に果たす役割の大きさを指摘する声も相次いだ。

語り合い住民編

河北新報社は1月27、29日、東日本大震災で津波に襲われた宮城県沿岸の被災地を巡り、防災・減災を考えるワークショップ「むすび塾」を開いた。通算63回目、過去にむすび塾を共催した全国8カ所の地方紙・放送局記者と参加住民を招いた「共催むすび塾@被災地」として実施。約30人が震災6年を迎える被災地で、地域防災に必要な視点を確かめた。

震災契機に地域の備え



各地で展開した「共催むすび塾」の詳細紙面を振り返りながら、被災地で学んだ教訓を語り合う住民たち＝1月28日、宮城県南三陸町の南三陸ホテル観洋

むすび塾の開催を機に地域の防災課題が浮き彫りになり、取り組みが進んだ事例も紹介された。

観光客の津波避難をテーマに、兵庫県淡路島で昨年9月9日あったむすび塾に参加した神戸学院大2年田中瞳さん(21)は「地元ホテルと市が災害応援協定を結ぶ話が動き出した」と報告。京都市伏見区の向島駅前

● 報道への期待

地域防災の媒介役として報道の役割に期待する声も上がり、「むすび塾での議論が大きく報道され、住民の防災意識が高まった」「震災被災地の語り部や記者という『よそ者』に防災活動に参画してもらって、マンネリの打破になった」といった意見が出た。

住民ひとこと



【むすび塾後の変化】「宮崎むすび塾」では避難場所付近の崖崩れやプロック塀の危険性を学び、避難ルート再確認をした。地元では「東北のような高い津波は来ない」との声も聞かれるが、安易に決めつけてはいけません。被災地を見て、震災体験者の話を聞くことが大事だ。宮崎市長・木花保貴園主任保育士・児玉のぞみさん(44)



【被災地を視察して】阪神大震災直後に現地にいき、爆撃を受けた痕のよくな光景にショックを受けたが、今回はそれ以上の衝撃だった。津波の恐ろしさを伝えるため、高野会館や気仙沼向洋高といった震災遺構を広く公開し、小学校高学年から学ばせる必要がある。被災にも役立とうと、東京都文京区・豊島ヶ岡町会長・鎌田邦彦さん(78)



【参加して】百聞は一見にしかず、震災遺構や語り部のメッセージは強烈だった。「犠牲を繰り返してほしくない」との訴えは心打たれた。災害時、人は正解のない判断を迫られる。うろたえないためには日頃の備えが欠かせない。被災地に足を運ぶことは何よりも重要だと知った。大阪府住吉区・東粉浜連合振興町会連絡役・藪本雅章さん(65)



【参加して】これまで映像でしか知らなかった被災地を、二次元的に知ることで、津波の恐怖を体感した。復興の経過を見ると、命が助かった後に何をすべきか考えておくことも課題だ。防災技術は進歩しているが、足を運ぶ必要があると感じる。防災は常に現場が必要だ。高知市・潮江南防災連合会事務局長・川上政寿さん(49)



【被災地を視察して】震災遺構の重みを感じた。足を踏み入れるのはためらみがあったが、現場に立つて考えが変わった。震災を経験していない人に命、備えの大切さや災害の怖さを知ってもらうには遺構以上の存在はない。多くの犠牲を無駄にしないよう遺構を残してほしい。神戸市・副委員長・田中瞳さん(21)



【参加して】南三陸町戸倉小の児童らが最後は神社へ避難して難を逃れた話を聞き、まちの神社仏閣には意味があると感じた。掘り下げると避難場所やルートが見えてくるかもしれない。震災遺構は大事だ。悲しさを伝えるためには、ありのまま残す方が伝わると思うが、その難しさも分かった。愛知県豊南町商工課係長・加藤和彦さん(44)

専門家から



日本災害情報学会会長 田中 淳さん(62)

孤立せずにつながろう

各地の防災の現状を聞き、地域の悩みは深いと感じた。行政には予算や公平性の問題があったり法制度がないと動けなかったりと対応には限界がある。町内会長が一人で頑張る、孤立しがちな状況もある。(さまざまな主体が)つながる意味は大きい。

新聞社が言う「災害への備え」という「上から目線」の傾向があったが、自分たちでイベントを任せていくのはいい取り組みといえる。

今回の視察を聞いた語り部の言葉は重く、大きな意味がある。今後の防災に生かしてほしい。地域の力を引き出せていた所から何を学んでいくのか。地元を目標に、災害を深く考えることが重要だ。

(東大総合防災情報研究センター長)

当事者から



「大川伝承の会」共同代表 佐藤 敏郎さん(53)

想定外に役立つ備えを

昨年11月、宮城県沿岸などに津波警報が出た際、石巻市では、スマートフォン向けゲーム「ポケモンGO」のキャラクター探しに来ていた人が避難した。災害時、自治体は住民以外の人も避難させなければならず、防災をさまざまな地域の人と考えることが大切だ。

訓練のための訓練、マニュアルのためのマニュアルになっていないか。想定外でも命は救われないといけない。避難訓練や防災対策は想定外のとときに役に立つかどうかが重要になる。

今回の参加者は被災地を訪れて話を聞く大切さを感じてくれた。私たち語り部の育成や受け入れ態勢を整えたい。語り部がそのまま伝えることは大事だが、つらいこともある。私たち自身が震災として向き合い、全国の人たちと共に、あの日の出来事を無駄にせず価値のあるものにしていきたい。(元中学教諭・石巻市)

命守るため発想を転換



元気仙沼市危機管理監 佐藤 健一さん(63)

気仙沼市杉ノ下地区は震災前、市内で最も防災活動に熱心な地域だった。しかし、震災では地区民の3割に当たる93人もの犠牲を出してしまっ

た。

その多くは地区の高台の避難場所へ逃げて津波にのまれた。ここなら安全と考え、避難場所を決めたのは私。本心に悔やんでも悔やみきれない。場所を指定する際は、過去の津波被害はもうろく、最新の研究も踏まえた。「過去には…」想定では、「…」という発想では命を守れない、この震災で思い知らされた。

有事に求められるのは状況に即応できる力だが、訓練の多くはマニュアルをこなすだけになっていないか。想定外をなくすために、発想や手法を改めなければならないと考えている。

東日本大震災の体験や教訓を振り返り、専門家と共に防災や避難の課題を語り合ってください。町内会や学校、職場など10人前後の小さな集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022(211)1591。

次回のむすび塾は28日、宮城県南三陸町観洋で開きます。